



Title	第二部 部局史 . 獣医学研究科・獣医学部
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 925-948
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28186
Type	bulletin (article)
File Information	hokudai125yr_tsuusetsu_925.pdf



[Instructions for use](#)

獣医学研究科・獣医学部

第一章 学部独立前（農学部時代）

獣医学部は一九五二（昭和二七）年に農学部内の一学科であった獣医学科が分離独立したものである。獣医学教育は札幌農学校初期から始まる長い前史をもっている。また、この前史は単に獣医学の講義が学生に課せられていた時代と、初めて専門講座として獣医学講座が設置された一九一〇（明治四三）年以降の時代とに分けることができる。

獣医学の開講は、一八七八年九月に札幌農学校教師として来校した米国人ジョン・C・カッター（John C. Cutter）が、一八八〇年より第四年級の獣医学及び実習を担当したことに始まる。カッターは本来医学者であり、農学校で生理学、解剖学、獣医学および英文学を担当するとともに、開拓使の札幌病院顧問としても功績があった。

カッターは一八八七年一月に帰国した。同年三月には駒場農学校出身（東京大学農学部畜産獣医学科の前身）の須藤義衛門が農学校助教として迎えられ、翌年二月教授となり、一八九一年八月母校帝国大学農科大学の助教として転任するまで、獣医学などを担当した。カッター在任中、農学校第二期生の南鷹次郎（のちに第二代北海道帝国大学総長）が一八八一年卒業後、駒場農学校で、二年間の獣医学研究を終えてもどり、一八八三年以後獣医学を講義した。須藤の転任後、一八九二年北海道庁技手小圃虎五郎、一八九四年旭川師団二等獣医内藤銅次郎が、それぞれ囑託講師となった。

一八九五年四月一日、札幌農学校は文部省直轄となり、翌一八九六年十二月上田半二郎が助教となり、獣医学の講義が続けられた。上田は一八八九年農芸伝習科第一期卒業生であり、翌年六月札幌で行われた北海道初の獣医開業試験に合格した。また彼はポプラ並木の創始者（一九二二年植樹）としても知られている。ついで一九〇五年

九月に加藤泰治が講師となった。加藤は一八八九〜九二年札幌農学校に在学し、のち米国ミネソタ大学を経て一九〇〇年カナダのマギール大学を卒業して帰国し、北海道庁に籍を置いていた。

やがて一九〇七年九月、札幌農学校は東北帝国大学農科大学となり、畜産学を含む四学科が置かれ、九月十一日に開学式が行われた。次いで、一九一〇年三月二十六日勅令第六八号をもって獣医学講座（家畜内科学講座の前身）が増設され、すでに一九〇七年に助教となっていた加藤が教授となり、担当した。これよりさき一九〇九年七月、東京帝国大学農科大学から小倉鉦太郎が迎えられ、加藤とともに獣医学を担当していたが、一九一一年五月二日獣医学第二講座（家畜外科学講座の前身）が増設され、小倉がその担当者となり、獣医学講座は獣医学第一講座と改称された。一九二二年六月二十五日東北帝国大学農科大学家畜病院規程が制定され、札幌及び周辺の家畜診療の中心的存在となった。また、この年十月十六日付けをもって、畜産学科卒業生には獣医免許状が下付されるようになり、翌年の卒業生一六名から適用された。一九一三（大正二）年六月三十日、東北帝国大学農科大学規則の一部を改正し、畜産学科に第一部及び第二部を置き、九月十一日より施行した。第二部では畜産学の他、獣医内・外科学を教えることとなり、一九一四年からは第二部卒業生に対して獣医免許状が下付されるように改められた。東北帝国大学農科大学は一九一八年四月一日から北海道帝国大学農科大学となり、さらに翌一九一九年四月一日からは農学部・医学部の二学部からなる北海道帝国大学となった。

一九二〇年九月に家畜衛生学講座が増設され、東京帝国大学農科大学獣医学科卒業の葛西勝彌が翌年四月から担当した。一九二四年教授となり、一九三三年四月北里研究所に移った。

家畜衛生学講座に続いて一九二二年五月比較病理学講座が増設され、市川厚一が担当した。市川は一九一三年東北帝国大学農科大学畜産学科を卒業後、旧制大学院に進み、東京帝国大学医科大学に国内留学し、山極勝三郎教授（病理学）の下で人工タール癌の研究に従事した。一九一九年五月に帝国学士院賞を受賞した。同年講師となり、

助教を経て一九二五年教授に昇任し、一九四六年三月、健康を害して辞任した。四講座による畜産学科第二部時代は長く続き、その間、日中戦争と第二次世界大戦を経験した。

卒業生の数は、大正末期には毎年ほぼ五名前後であったが、それ以前は一、二名の年が多く、一九二〇年には卒業生がなかった。昭和に入ると五〇一〇名となり、一九四〇年以降は毎年一〇〇一五名であった。当時卒業生は国内の教育・研究領域や陸軍獣医部（委託生制度があった）に、あるいは満州国に活躍の場を求めた。獣医学教育は一応軌道に乗っていたが、講座数が少ないこともあって、相当の部分は他学部教官の応援に頼らざるを得なかった。比較病理学講座増設後、しばらく講座増設をみなかったが、第二次世界大戦も終わりに近い一九四四年十二月に家畜解剖学講座が増設され助教教授武野毅二郎が担当し、一九四五年七月山極三郎を経て、翌年十二月から高畑倉彦が担当した。

終戦後、大学そのものが大きく変化した。すなわち、一九四六年四月一日をもって、畜産学科第一部と第二部が合併して畜産学科となり、翌一九四七年九月三十日には政令第二〇四号によって北海道帝国大学は北海道大学と改められた（実施十月一日）。さらに、一九四九年四月畜産学科は再度獣医学科と畜産学科に二分された。一方、この年九月二日の農学部教授会において獣医部分離案が提出可決され、獣医学部独立の歩みが始まったが、その間の事情は後述する。

翌一九五〇年四月には家畜生理学講座が増設され、翌年七月から医学部出身の本間慶蔵が担当した。獣医学部独立前には、獣医学第一、獣医学第二、家畜衛生学、比較病理学、家畜解剖学及び家畜生理学講座の計六講座が、農学部内に準備されていた。

第二章 学部独立と学部の充実

獣医学部独立への動きは一九四九年夏頃に始まったが、中心になったのは平戸勝七（家畜衛生学講座）であり、当時農学部長は島善郷よしちかであった。独立の動機の最大のもは第二次世界大戦後の国内情勢にあった。GHQ内のPHW（公衆衛生福祉局）は、米軍獣医将校や獣医師を各地に派遣し、日本における公衆衛生とくに食品衛生及び獣医学教育についての検討や指導を開始した。それまでの獣医学教育は家畜に限られ、中でも馬が中心になる傾向が強く、米国流の獣医学とはやや異質のものであり、早急に切替を実施するには当然大きな困難が横たわっていた。農学部畜産学科は老朽校舎を使用していた関係もあって、施設面や对学生教育体系などの改善を要求され、できないならば廃校との線をも持ち出されるようになった。事実一九四九年五月十日には、島農学部長に、「畜産学科が考えを改めないならば閉鎖を命ぜられるだろう」と実際に宣言されるまでとなった。これを契機に平戸と山極三郎（比較病理学講座）が島農学部長を訪ね、獣医学部の独立を相談した処、独立した学部を創って高い専門教育に徹すべきであるとの同意を得、同年九月二日の農学部教授会において獣医学部分離案が可決されたのである。

一九五一年七月には北海道獣医師会、農業諸団体、同窓生などを中心にした獣医学部設置期成会が結成された。その前年十月二十五日をもって伊藤誠哉学長がイールズ事件により辞任し、島農学部長が学長になっていた。前述期成会が作成した獣医学部設置に関する陳情書によれば、当初は既設六講座と併せて一〇講座とする計画であった。しかし、度重なる文部省関係部局に対する陳情の継続中に、講座増設を学年進行に持ち込み、当初案に家畜伝染病学講座及び家畜臨床繁殖学講座を加えた一二講座に修正されたのである。

学部設置理由として家畜衛生及び公衆衛生の重要性が前面に打ち出されていたが、家畜衛生関係ではとくに馬の

伝染性貧血症（伝貧）が強調されていた。第二次世界大戦以前は北海道は馬産の中心地であり、大正末期からは常に二〇万頭以上三〇万頭近い頭数を誇っていた。農業、輸送、軍用などに需要が大きかったからで、当然獣医学も馬中心であり、牛は徐々に増加はしていたが多くとも八万頭台にすぎなく、戦後一九六五年を境に牛が三〇万頭台を超え、馬が二〇万頭台を割ったのである。馬産上多くの重要疾患があったが、中でも伝貧は猛威を振るい一九五〇～五二年には年間四〇〇〇頭以上発生し、すべて法令殺処分となっていたのである。

一九五一年十二月二十九日に至り、大蔵省より獣医学部設置の内示があった。ついで翌一九五二年二月十七日大学設置審議会総会において獣医学部案を承認し、獣医学部設置が確定した。

以上のような経緯で三月三十一日法律第二二号をもって農学部獣医学科は獣医学部に昇格したのである（四月一日実施）。四月一日、獣医学部に家畜内科学、家畜外科学、家畜衛生学、比較病理学、家畜解剖学、家畜生理学及び獣医公衆衛生学講座を置き、学科を獣医学科と定めた。また獣医学第一及び獣医学第二講座は、それぞれ家畜内科学及び家畜外科学講座と改められた。ついで北海道大学獣医学部規程は九月三十日海大達第三六号をもって定められた（適用四月一日）。

学部創設に際し、獣医公衆衛生学講座が新設されて七講座となったが、その後年を追って家畜生化学、家畜伝染病学、家畜薬理学、家畜臨床繁殖学、家畜寄生虫病学、獣医放射線学講座の六講座が加えられ、総講座数は一三となった。

学部独立の三年前、一九四九年に新制大学学生の入学式が行われていたが、一九五三年三月二十五日に旧制最終及び新制最初の卒業式が行われてそれぞれ二四及び九名の農学部獣医学科学生が巣立った。結局、独立前の農科大学及び農学部の畜産学科第二部（一時一部・二部合併）・獣医学科に在籍して卒業した学生数は、合計四五二名に達した。最初の獣医学部学生二三名の卒業式は、一九五五年三月二十五日行われ、独立後二〇〇〇（平成二二）年

までの卒業生数は一五七〇名である。その間毎年の卒業生の数は一三丁四五名である。また、学部別入試に変わってからの獣医学部への入学志願者倍率は常に高く、前期で六倍以上、後期では二〇倍以上に達する。また、最近では帰国子女や外国人留学生の入学も増加しており、常に定員四〇名の線が続いている。

一九五三年三月二十六日、法律第二五号をもって北海道大学に新制大学院を設置することになり（施行四月一日）、さらに五月十三日文部省告示第四一号に基づき、大学院獣医学研究科には予防治療学専攻及び形態機能学専攻を含むことが決まり、修士・博士課程が定められた。修士課程最初の修了式は、二年後の一九五五年三月二十五日に挙行され、予防治療学専攻四名、形態機能学専攻二名であり、博士課程の場合は、一九五八年九月三十日形態機能学専攻二名であった。また二〇〇〇年までの学位授与者数は修士課程五四一名、博士課程二七七名であり、さらに論文博士が三四八名である。

一九四九年六月一日、新しい獣医師法が法律第一八六号をもって公布された。その結果、一九五三年から始まる新制大学の卒業者は、国家試験に合格しなければ新制獣医師免許を得ることができなくなった。

第三章 獣医学部新館建設

一九六二年一月十二日、教授会において獣医学部創設一〇周年に当たり記念式典、記念事業を行うことが決まった。その結果、九月二十八日からクラーク記念会館講堂において記念式典が内外二三名参加の下に挙行され、祝賀パーティーは同じく二階集会室において開かれた。その他に一般講演会及び学術映画会、学術講演会、記念出版、

学部開放、記念運動会、記念事業が組み込まれた。記念事業の中には標本館整備その他があり、学部新館建設促進強化も含まれている。獣医学部の旧校舎は北大正門を入れてクラーク像に至る途中、林学講堂の手前、現在の附属図書館の位置北九条西七丁目にあり、道路に面して畜産学科第一部、奥に畜産学科第二部と家畜病院とがあり、林学講堂との間に斜めに理学部方面の中央道路に抜ける道があった。校舎の建設は一九一〇年五月にさかのぼり、さらに一九一四年八月に増築されていた。一部ガス燈部品の残る建物で、時代柄豊富に木材を使用していたが、老朽化のためきわめて危険な状態であった。さらに学部独立による講座増加が原因で狭隘の上もなかった。このような事情から独立時すでに新館の必要性が切迫した問題として叫ばれていたのである。

一九六二年は学部創立一〇周年でもあり、新館建設運動に力が加わり、八月文部省における交渉の結果、約八〇〇坪の敷地が採用予定となった。翌一九六三年に至り、第一期工事が開始され、一九六四年に工事が完了した。ついで翌一九六五年三月二十五日をもって学部本館の一部教室、実験室、平病入院舎、伝染病入院舎、環境調整装置が落成した。さらに一九六六年三月二十五日第三期工事として残りの教室・実験室が完成し、学部全体が同じ場所に集結できたのである。七月九日新装成った学部会議室において校舎落成記念式典が挙行された。

その後年を追って建物・環境の整備が進められ、一九七一年十一月二十日獣医放射線研究棟の新築工事落成をもっていちおうの構想終了を見るに至った。

一九七七年、獣医学部は学部創設二五周年及び獣医学開講一〇〇年を迎え、同年九月十四日の記念式典を中心に諸行事が行われた。このように獣医学部は札幌農学校時代にさかのぼる長い前史を経ている。

獣医学部にとつての次の転機は、後に述べるように、一九八四年の獣医学教育六年制への移行にある。

第四章 六年制教育

獣医学教育年限延長については、一九四七年新制大学発足当初から問題にされ、日本獣医師会が中心となって取り上げられてきたが、具体的に実現に向けて検討されるようになったのは一九七五年である。

種々の検討の結果、一九八三年二月、「獣医学教育改善に関する調査研究会議」は従来の経緯を踏まえて検討した結果、次の如く答申した。「(一)学部段階で六年間の教育を実施し得る体制を確立する必要がある。(二)獣医学教育は、独立の学部で行うことが望ましいが、早期実現は困難である現状にかんがみ、現行の農学関係学部の中の獣医学科においても、学部六年制教育が実施できるよう措置する必要がある。(三)今後国立大学にあっては、現在の十大学に設置されている獣医学科を対象として再編整備を推進する必要がある。(四)獣医学の大学院は博士課程とし、その修業年限は四年を標準とすることが適当である。」

一九八三年五月、学校教育法の一部を改正する法律が成立した。

学校教育法の一部を改正する法律案要綱

- 一 大学において獣医学を履習する課程の修業年限を六年とすること。(第五五条第四項関係)
- 二 この法律は、昭和五九年四月一日から施行すること。(附則第一項関係)
- 三 一に伴い獣医師法に定める獣医師国家試験の受験資格を大学において獣医学の正規の課程を修めて卒業したものとすること。(附則第三項関係)

このような経過を経て一九八四年より六年制による獣医学教育が実施されている。また入学試験については一九四年度までは系別(文系、理系)入学試験を行い、入学後、教養課程を経て、成績に応じて希望学部に移行させ

区分	分野	授業科目	授業科目の種類	単位数	開講期													
					1年次		2年次		3年次		4年次		5年次		6年次			
					第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	第9期	第10期	第11期	第12期		
必修科目	臨床獣医学	獣医病理学	講義	4					2	2								
		獣医病理学実習	実習	1					1									
		獣医病理組織学実習	実習	1						1								
		獣医病理組織学実習	実習	1						1								
		獣医臨床診断学	講義	2					2									
		獣医臨床診断学実習	実習	2					1	1								
		獣医外科病態学	講義	2						2								
		繁殖学	講義	2							2							
		獣医内科学	講義	4							2	2						
		獣医内科学実習	実習	1							1							
		獣医外科学	講義	4							2	2						
		獣医外科学実習	実習	2							1		1					
		臨床繁殖学	講義	2									1					
		臨床繁殖学実習	実習	1									1					
	小動物臨床総合実習	実習	1										1					
	産業動物臨床総合演習	演習	2										2					
	共通	獣医学総合講義	講義	2	2													
		獣医学概論	講義	1		1												
		基礎獣医学演習	演習	2	2	2												
		獣医学英語演習	演習	2				2										
飼養管理実習		実習	2		1													
獣医学総合演習		演習	6									2	2	2				
獣医学総合実習		実習	3									1	1	1				
卒業論文	演習・実習	10										10						
選択科目	生物医科学	神経科学	講義	1							1							
	病因病態学	実験動物医学演習	演習	2								2						
		病態科学演習	演習	3								1	1	1				
	応用獣医学	放射線生物学演習	演習	2						2								
		獣医公衆衛生学演習	演習	1						1								
		獣医予防学演習	演習	3						3								
	臨床獣医学	毒性学演習	演習	2								2						
		獣医臨床総合演習	演習	2								2						
		獣医専門科診療実習	実習	2									1	1				
	共通	獣医臨床薬理学	講義	1							1							
現地実習		実習	2															

ていた。一九九三年度および一九九四年度ともに、獣医学部移行学生の成績は全学のトップクラスであった。一九九五年からは教養課程が廃止され、学部一貫教育となり、入学試験についても学部別に募集して選抜することとなった。入試は前期日程（二八名）、後期日程（一二名）の二回に分けて実施している。現在の授業カリキュラムを表1に示した。大学基準協会の「獣医学教育に関する基準」（一九九七年二月）では、獣医学部卒業に必要な取得単位数を一八二単位以上としている。うち五六単位程度を教養科目に、一二六単位程度を専門科目にあって、さらに専門科目のうち三〇単位程度を専修授業科目にあてることとしている。獣医学部の現行カリキュラムでは、卒業に必要な単位数が二〇五単位、教養（全学教育）科目五八単位以上、専門授業科目が一四七単位、そのうち専修授業科目が一〇単位、卒業論文が一〇単位である。したがって、特に専門授業科目の単位数を三〇単位近く減らし、専修授業科目を一〇単位程度増やす方向で検討を開始した。

第五章 大学院重点化

獣医学研究科の目指すべき教育目標は従来から教育研究の後継者養成にあるとされてきた。一方二二世紀においては、地球人口の増加に伴う世界的な食料、エネルギー不足、新興感染症の発生や地球環境汚染の進行、人口高齢化による社会的諸問題が一段と顕在化し、これらを解決するための生物科学的研究が益々必要とされる。これらの研究において高度な獣医学的知識、技術を身につけた獣医学研究者の参画が問題解決のために必須となる。そこで、これらの分野で我が国のみならず世界的にも広く活躍できる高度の獣医学的知識と技術を備えた人材を養成する必

要が生じてきた。そのためには、北海道大学獣医学研究科が我が国のみならず世界の獣医学研究の拠点とならなければならぬ。

しかし、このような目標を達成する上において、これまでの大学院の教育研究組織には大きな欠陥が指摘された。その最大のもは、大学院が学部依存していることであつた。このために、効果的な大学院教育を行うことが困難であるばかりか、大学院の教育研究活動を沈滞させているようにも見受けられた。すなわち、それまで大学院学生の教育は個々の学部の小講座に委ねられていたが、そのような教育環境では幅広い知識と総合的な判断力を持つ人材は育成され難い。従つて社会の要請に応じた有能な人材を養成し、高度な研究を行うことにより研究科を発展させるために、大学院組織の改革が必要とされた。

そこで一九九二年一月に獣医学部において点検評価内規を制定すると共に点検評価委員会を設置し、本学部の教育研究活動の自己点検を実施した。第一回目は一九九一―九二年の教育研究活動について調査し、一九九三年十月に『北海道大学獣医学部点検評価報告書』第一号として刊行した。その中から獣医学の多様化・高度化・国際化に対応した大学院本研究科の重点的整備が必要と指摘された。これを受けて一九九四年度に新しい教育研究組織の構築が試みられた。その骨子はこれまで学部に所属していた各小講座を大学院所属の大講座に再編し、教官を大学院所属としたことであり、いわゆる、大学院部局化あるいは大学院重点化と称される制度改革である。この制度改革は一九九五年度の文部省概算要求で認められ、一九九五年四月から新たな北海道大学大学院獣医学研究科が発足した。大学院の改革の概要は以下の通りである。 獣医学部の教官組織を大学院獣医学研究科に移行し、研究科を部局化する。 研究科の形態機能学及び予防治療学の二専攻を獣医学専攻の一専攻とし、獣医学を総合的に教育研究する。 研究科の講座は大講座とし、大講座は四―五教室で構成する。講座は「比較形態機能学」、「動物疾病制御学」、「診断治療学」及び「環境獣医科学」の四講座とする。 助手四名の振替により、教授二名の研究科専任教官を配

表2 獣医学部の旧小講座と大学院獣医学研究科の新大講座の関係

【獣医学部の旧小講座】

講座名	講座の内容
家畜解剖学	家畜の骨格と臓器の形態学に関する教育研究、特にリンパ組織の分化と機能的役割の解明
家畜生理学	動物体の機能に関する教育研究、特に分泌の細胞機構に関する教育研究
家畜生化学	生体の構成物と化学反応に関する教育研究、特に代謝調節の分子機構に関する教育研究
家畜薬理学	薬物の構造と作用に関する教育研究、特に副腎、平滑筋の受容体の解明
実験動物学	実験動物の生理、生産に関する教育研究、特に疾患モデル動物の開発
家畜衛生学	微生物学に基づいた家畜衛生の向上に関する教育研究、特にウイルスの進化と予測に関する研究
家畜伝染病学	伝染性疾患の感染、発病と予防に関する教育研究、特に原虫病ワクチンの開発
家畜寄生虫病学	家畜寄生虫の感染、発病と予防に関する教育研究、特に包虫に関する研究
家畜内科学	家畜の内科的疾患の診断、治療に関する教育研究、特に血液疾患に関する研究
家畜外科学	家畜の外科的疾患の診断、治療に関する教育研究、特に新しい画像診断法、麻酔管理法の開発
家畜臨床繁殖学	家畜の繁殖、生産に関する教育研究、特に体外受精、胚移植に関する研究
比較病理学	動物の病理解剖・組織学の教育研究、特に遺伝性神経疾患の病態解明
毒性学	動物に対する化学物質の毒性に関する教育研究、特に生体防御酵素に関する環境毒性学的研究
獣医公衆衛生学	人畜共通伝染病並びに公衆衛生に関する教育研究、特に日本脳炎などの疫学的研究
獣医放射線学	放射線生物学・診断学の教育研究、特に放射線発ガンに関する研究

【獣医学研究科の新大講座】

講座名 (教室名)	講座の内容
比較形態機能学 (解剖学) (生理学) (生化学) (薬理学)	種々の動物の機能と構造の関係を比較し、共通性と多様性の要因、系統発生との関連性についての教育研究を行う。
動物疾病制御学 (微生物学) (感染症学) (寄生虫学) (実験動物学)	人畜共通伝染病を含む動物の感染症について、病原体の種類、性質、感染・伝播様式、発病機序、宿主防御機序に関する教育研究を行う。
診断治療学 (獣医内科学) (獣医外科学) (比較病理学) (繁殖学) (臨床分子生物学)	動物疾病の臨床病理学的、血液学的及び生化学的検査をもとにした精度の高い総合臨床診断法と、内科学的及び外科学的治療法の組合せによる効果の高い治療法についての教育研究を行う。
環境獣医学 (公衆衛生学) (放射線学) (毒性学) (生態学)	物理的、化学的、生物学的環境要因が動物の生態、行動、機能、遺伝子に及ぼす影響についての教育研究を行う。

置し、新たな教育研究分野に対応することとした(表2)。

このようにして大学院重点化が達成され三年を迎えた一九九七年度において、研究科点検評価委員会は「重点化による成果」について自己点検を行うこと、そしてそれに基づいて外部評価を実施することを決定した。点検評価委員会では(一)組織・運営、(二)施設・設備、(三)教育活動(大学院教育と学部教育)、(四)研究活動、(五)教育研究支援体制、(六)国際交流、(七)附属家畜病院、(八)点検評価体制の八項目にまとめた。これらの結果について『北海道大学大学院獣医学研究科・獣医学部自己点検評価報告書(第二号) 大学院重点化の現状と問題点』として公表した。さらにこの自己点検評価をもとに外部評価を実施した。評価委員の構成は国内からの九名とアメリカとカナダからの三名であった。上記の八項目について三段階評価を行い、Aは一〇〇点、Bは七〇点、Cは四〇点として合計し、平均値を評価点とした。これらの結果は『北海道大学大学院獣医学研究科・獣医学部外部点検評価報告書 大学院重点化の目的はどこまで達成されつつあるのか』として公表した。評価の結果、ほとんどの項目についてA(大変良い、重点化の効果がみられる)、またはB(良い、重点化の効果が上がりつつある)と高い評価であった。

第六章 施設の新築・改修

本学部の旧校舎は、現在の附属図書館付近である北九条西七丁目位置していたが、一九六三年に現在地での新館建築が認められ、まず、第一期工事として臨床系講座の研究室を含む附属家畜病院が着工し、翌一九六四年完成

した。次いで、第二期、第三期工事として、一九六五年及び一九六六年の二カ年度に亘って研究管理棟（本館）が建築された。また一九六五年に平病入院舎、伝染病入院舎が、一九六七年に中動物と感染実験用の第一動物舎が、一九六八年に大動物用の第二動物舎が完成し、その後、逐次、建物・環境が整備され、一九七一年に放射線棟が完成し、一応、建物構想の終了を見た。

その後当分の間は、新たな建物の建築・改修等の計画はなかつたが長年の懸案であつた、獣医学教育六年制問題は、一九七七年に至り、獣医学教育年限延長を目的とした「獣医師法の一部を改正する法律」の公布によつて、獣医師国家試験受験資格は修士課程修了者に引き上げられ、一九七八年以降の大学入学者から適用されることとなつた。そして、一九八三年には、学校教育法の一部が改正され、一九八四年四月から獣医学教育六年制へ移行したが、それに先立つこと二年前の一九八二年に、そのための措置として、実験研究棟（E棟）が新築された。

一方、附属家畜病院及び家畜入院舎、実験動物舎は、いずれも建築後二五―三〇年を経過して老朽化が進み、社会のニーズにあつた獣医療の実施や狭隘化による動物収容の困難性等、現代の獣医学教育に適合しなくなつたことから、一九九四年度概算要求において、附属家畜病院の大型改修、動物施設の改築が認められそれまでの老朽化した建物から近代的な建物に生まれ変わり、長年の懸案事項が大幅に改善された。

また、一九八四年からの獣医学教育六年制への移行、一九九〇年の大学院設置基準の一部改正による獣医学研究科の修士課程の廃止と博士課程四年制への移行等による教育研究体制の整備・充実として、一九八六年には実験動物学講座が、一九九〇年には毒性学講座が新設されたが、建物の増築はなされていなかったこと、更に、一九九五年の大学院重点化により、一九九六年度概算要求において未整備建物の増築要求が認められ、研究棟（S棟）が完成した。この新棟の完成により、研究管理棟（本館）とE棟から四教室が移転し、新たな体制で研究室を開設できることとなり、一部狭隘化が緩和された。

しかし、獣医学部管理研究棟(本館)の老朽化は激しく、改修あるいは改築が一〇年来の研究科の懸案事項であった。本館は一九七五、七六年竣工で、雨漏り、外壁の落下、床の亀裂等の老朽化は著しかった。窓枠の老朽化による隙間風などにより冬季間の教室温度は低く、学生から苦情が出るほどであった。一九九七年度までは本館の改築で予算要求を提出していたが、そのままの改築の案では予算が通りにくいとの考え方から、一九九八年からの概算要求は改修で行うこととした。一九九九年九月に政府予算で留保されていた公共事業費のうちから、台湾の大地震を契機に耐震構造改善という名目で大学の建物にも予算が振り分けられた。この予算は公共事業の予備費で翌年度に繰り越しは認められず、工期は二〇〇〇年三月三十一日までとされた。そのため工期を二つに分け、第一期に本



写真1 大学院獣医学研究科・獣医学部研究棟
(左手:本館、右手奥:S棟)



写真2 大学院獣医学研究科放射線棟



写真3 大学院獣医学研究科動物施設

館東側半分、第二期に西側半分を行うこととした。十二月一～三日にプレハブ仮建物に東側半分の教室が移り、工事が開始された。二〇〇〇年二月十八～二十日には本館東側工事が完了し、さらに四月九日まではすべての工事が終了した。四月十六～十九日には、プレハブ建物から本館西側への教室の引っ越しが終わり改修が終了した。二〇〇〇年六月五日には改修完了の記念式典が、総長、両副学長、事務局長の参加を得て学部会議室で、また祝賀会が札幌会館で挙行された。改修された本館ならびに他の建物の写真を示す（写真1～写真3）。

第七章 獣医学部附属家畜病院 （通称 動物病院）

一九一二年に開設された家畜病院は、これまで我が国における獣医学教育の先駆的役割を果たしてきた。一九六四年に建設された病院本館は老朽化が進み、次第に社会のニーズにあつた獣医療を担ってゆくことが困難になってきたため、一九九四年度に改築を行い施設・設備の拡充が図られた（写真4）。現在家畜病院（延べ床面積二八〇〇平方メートル）の一階には事務管理、診療および教育部門が置かれ、二階には臨床系（内科学および繁殖学教室と病院専任教官）の研究室が置かれている。

診療体制の充実を図る目的で、二〇〇〇年度から、一般臨床検査、特殊検



写真4 獣医学部附属家畜病院

査、病理検査および画像診断の四部門からなる臨床検査科が新設され、従来単一の診療科であった内科は第一および第二内科の二診療科体制となっている。診療は、一名の病院専任教官と二名の大学院診断治療学講座の兼務教官および二〇〇〇年度より導入された非常勤獣医師により、第一および第二内科、外科および繁殖科の四診療科体制で行われている。一九九九年には高度獣医療を目指す一環として、X線CT装置が設置された。

家畜病院には、地域社会に獣医療の場を提供するほか、得られた知識を獣医学教育および研究に反映させること、さらには卒後研修や獣医師間の情報交換の場としての機能が求められており、近年の病院施設の拡充および組織改革はこれらの家畜病院の機能を飛躍的に向上させるものと考えられる。

第八章 国際交流

獣医学研究科・獣医学部では従来から数々の国際交流を実施し成果を上げてきた。ここにはその中、代表的な事例につき記載する。

ザンビア大学獣医学部技術協力計画が持ち上がったのは一九八〇年代の初めであった。数回の調査団の派遣を経て一九八五年から日本国際協力事業団（JICA）による技術協力が始まった。フェーズ は一九八五年から五年間の一九九〇年まで、その後二年半の延長があり、一九九二年より五年間のフェーズ が実施された。一九九七年七月にフェーズ が終了し、計一三年余りの長きにわたる技術協力であった。この技術協力を中心的にささえてきたのは北大獣医学部であった。すなわち国内支援委員会の中心メンバーであり、一三年余りに長・短期専門家を九

六名余り派遣したがそのうちの半数以上の五四名は本学部関係者であった。ザンビア大学獣医学部ではフェーズ終了時の一九九七年までに八回の卒業生、計一四五名を世に送り出した。これら卒業生のうち英国等での修士修了者が二三名、日本（北大が中心）等での博士取得者が九名にのぼった。一九九七年のフェーズ終了時点でのザンビア人教官数は二一名であり、留学中教官を含むザンビア人教官数は三四名で実に定員の七割余りがザンビア人教官となった。北大獣医学部を中心にした一三年余にわたる技術協力は、ゼロから出発したザンビアにまがりなりに獣医学教育の基礎を植えたと言える。現在はフォロアアップとして一名の長期専門家（北大の退官教官）が派遣されている。また一九九九年から、五年計画で第三国研修が実施され、一九九九年、二〇〇〇年と本学部関係者が派遣され、専門家研修を実施している。

獣医学研究科姉妹大学については、一九九一年よりザンビア共和国ザンビア大学獣医学部と大韓民国ソウル大学校獣医科大学、一九九八年より大韓民国全北大学校獣医科大学と、それぞれ学部間の国際交流協定を締結し、研究者や学生交流、共同研究、学術情報交流を行ってきたが、その後ソウル大学校と全北大学校については、大学間交流協定に変更されたので、現在はザンビア大学獣医学部とのみ交流協定を締結・更新している。

海外技術協力研修プログラム「狂犬病などのウイルス性人畜共通伝染病の診断法と予防法」については、一九九六年から実施している（写真5）。狂犬病は、日本ではみられなくなって久しいが、世界人口の



写真5 海外技術協力研修プログラム「狂犬病などのウイルス性人畜共通伝染病の診断法と予防法」第一回開講式（1997年1月19日）

九〇%が今もなお、感染の危険に曝されて生活しており、狂犬病が疑われるイヌに咬まれて、暴露後免疫のためにワクチンの接種を受けるヒトは年間五〇〇万人を超える。被害の大部分は開発途上国で発生しており、これらの国々では、狂犬病診断技術水準が低く、予防対策はほとんど実施されていないのが現状である。本コースはこのような背景の下で、主にアジア、アフリカ、オセアニアにおける狂犬病を含む人獣共通伝染病の診断と予防技術の向上を図り、グローバルな人獣共通伝染病制圧計画の中核となる人材を養成するために開設されたものである。開発途上国の公衆衛生に携わる獣医師を対象に、講義、実習、見学を実施して、人獣共通伝染病の基礎知識、診断技術ならびに公衆衛生行政の実際を体得せしめ、もって各国ひいては世界の人獣共通伝染病の予防と制圧に寄与することを目的とするものである。二〇〇〇年度で五回目を迎え、さらに二〇〇一年度から、「人獣共通伝染病の予防と制圧のための研修コース」を提供することとし準備しているところである。

あとがき

獣医学研究科は二〇〇二年をもって学部創設五〇周年および獣医学開講二二五年を迎える。このように獣医学研究科は札幌農学校時代にさかのぼる長い前史を経ているが、本稿では簡略に触れざるをえなかった。

日本における獣医学教育は現在大きな転換期にあるといえる。すなわち国内の獣医学教育のレベルをいかに欧米並に上げて、国際化に対応するかが問題となっている。そのため現在、大学の再編も含めて種々検討されている状況にある。

また、最近是国内で牛の口蹄疫や雪印乳業の大規模食中毒など獣医学に関連した事件が多く発生している。この

よくな社会的に大きな影響のある事件を予防したり、迅速に対応して被害を最小限に食い止めるためにも獣医学が今後、益々重要になってきている。そのような状況下に北海道大学獣医学研究科・獣医学部の歴史を今一度、振り返ってみることも必要であろう。

(執筆責任者 高島郁夫、執筆分担者 橋本晃・伊藤茂男・葉原芳昭)

参考文献

- 『北海道大学獣医学部同窓会報』(一九七七～一九九九年)
- 『北海道大学獣医学部史 創立10周年記念』(一九六三年)
- 『北海道大学獣医学部創設25周年および獣医学開講100年記念写真集』(一九七八年)
- 『北海道大学大学院獣医学研究科・獣医学部 自己点検評価報告書』第一、二号(一九九三、九八年)
- 『北海道大学大学院獣医学研究科・獣医学部 外部評価報告書』(一九九八年六月)

年 表 一九七六年以前は、北大百年史、部局史を参照。

一九七七(昭52)	濱田輔一名誉教授となる	4・1	藤本胖名誉教授となる
4・2		5・1	波岡茂郎学部長となる
9・14	学部創立二五周年及び獣医学開講一〇〇年記念式典を行う	一九七八(昭63)	大学院獣医学研究科の修士課程が廃止、新たに四年制の博士課程が設置
	「獣医学部学術交流基金群」設立	3・25	3・25
一九七八(昭53)	『獣医学部創立25周年及び獣医学開講100年記念写真集』刊行	4・1	菅野富夫学部長となる
3・30	藤本胖学部長となる	5・1	一九八九(昭64、平1)
5・1		3・25	了式
一九七九(昭54)	第八八回日本獣医学会を開催(教養部校舎)	一九九〇(平2)	六年制獣医学部最初の卒業式
8・22		3・31	五年制大学院獣医学研究科修士課程廃止となる
一九八〇(昭55)	梁川良学部長となる	4・10	四年制大学院最初の入学式
5・1		5・1	金川弘司学部長となる
一九八二(昭57)	新実験研究棟(E棟)一一七三平方メートルの新築工事落成	6・8	毒理学講座を増設
3・25		一九九一(平3)	大賀晴名誉教授となる
4・2	酒井保・石川恒名誉教授となる	4・1	一九九二(平4)
5・1	大賀晴学部長となる	5・1	清水悠紀臣学部長となる
一九八四(昭59)	学校教育法の一部改正により獣医学教育六年制となる	9・30	第一一四回日本獣医学会を開催
4・1			
5・1	久保周一郎学部長となる		
一九八六(昭61)	実験動物学講座を増設		
4・1			

一九九三(平5) 波岡茂郎、戸尾妃祺明彦名誉教授となる

一九九四(平6)

4・1 板倉智敏学部長となる

4・1 清水悠紀臣名誉教授となる

7・15 附属家畜病院の改修着工

7・28 動物舎の改築着工

11・30 附属家畜病院(二八〇〇平方メートル)の改修工事落成

一九九五(平7)

3・28 動物舎(一五八八平方メートル)の改築工事落成

4・1 大学院重点化による改組

獣医学研究科の形態機能学専攻及び予防治療学専攻を再編成し、獣医学専攻を設置。

比較形態機能学講座、動物疾病制御学講座、診断治療学講座及び環境獣医学講座の四大講座設置。

獣医学部の獣医学科を再編成し、新たな獣医学科設置

「生物医科学」、「病因病態学」、「応用獣医学」及び臨床獣医学」の四学科目設置。

臨床分子生物学教室、生態学教室を増設。

学部別受験開始。

一九九六(平8)

4・1 板倉智敏教授副学長となる

4・1 前出吉光獣医学研究科長となる

4・1 橋本信夫、佐藤文昭名誉教授となる

11・15 S棟新築

一九九七(平9)

4・1 板倉智敏、菅野富夫名誉教授となる

一九九八(平10)

1・24 外部点検評価実施

4・1 前出吉光研究科長再任される

4・1 金川弘司名誉教授となる

一九九九(平11)

2・20 放射線棟移転新築

4・1 前出吉光副学長となる

4・1 藤田正一研究科長となる

4・1 中里幸和名誉教授となる

二〇〇〇(平12)

3・31 本館改修